

φαινομενον

現象学年報

Jahrbuch der japanischen Gesellschaft für Phänomenologie  
Annual Review of the Phenomenological Association of Japan  
Annuaire de l'association japonaise des phénoménologues

ΚΑΙ

40

日本現象学会編  
2024

λογος





# 『現象学年報』第40号

## 目次

### 特集「喪失をめぐる対話——経験の多面性を見つめて」

- 金子 絵里乃 ..... 1  
愛する人との死別を通して生まれ、変容すること
- 鈴木 生郎 ..... 21  
悲嘆の価値を捉える
- 中 真生 ..... 35  
子どもの経験から「喪失」を考える

### 【男女共同参画・若手研究者支援ワークショップ】

- 教養としての哲学・倫理学——初期キャリア研究者が何をどう教えるか ..... 55  
提題者：三村 尚彦・宮原 優・渡邊 浩一  
オーガナイザー：金成 祐人

### 【特別寄稿論文】

- ユッシ・バックマン（金成 祐人 訳） ..... 65  
超越論的観念論と強い相関主義——メイヤサーとハイデガー的有限性の終焉

### 【投稿論文】

- 大内 良介 ..... 87  
痛みの逆説——生きられる身体による現象学的解決の不可能性について
- 中谷 碩岐 ..... 103  
前期デリダのフッサール読解における正常性の問題

### 【エッセイ】

- 田口 茂 ..... 119  
追悼 クラウス・ヘルト氏（Klaus Held, 1936–2023）  
ヘルト教授の遺されたもの

陶久 明日香	123
追悼 クラウス・ヘルト氏 (Klaus Held, 1936–2023)	
故郷世界、異郷世界、唯一の世界——ヘルト先生を偲んで	
池田 喬	127
日本現象学会「男女共同参画・若手研究者支援ワーキンググループ」の10年	
野々村 伊純	135
国際メルロ＝ポンティ・サークルに参加して	
<b>【書評】</b>	
赤坂 辰太郎	141
ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣 人種化された身体のパノラマ』	
(小手川正二郎、酒井麻依子、野々村伊純 訳、青土社、2023年)	
小川 歩人	147
亀井大輔・長坂真澄 編著 峰尾公也・加藤恵介・齋藤元紀・須藤訓任 著	
『デリダのハイデガー講義を読む』(白水社、2023年)	
小平 健太	155
Yuko Ishihara & Steven A. Tainer	
<i>Intercultural Phenomenology: Playing with Reality</i> (Bloomsbury, 2023)	
〈現実〉を生きるための現象学	
綿引 周	163
富山豊『フッサール—志向性の哲学—』(青土社、2023年)	
日本現象学会会則	171
研究奨励賞について	172
編集後記	172
日本現象学会への入会方法	173



# GENSHÔGAKU NENPÔ 40

Jahrbuch der japanischen Gesellschaft für Phänomenologie  
Annual Review of the Phenomenological Association of Japan  
Annuaire de l'association japonaise des phénoménologues

## Contents

### Special Issue: Dialogues on Loss

- Erino KANEKO ..... 1  
Creating and Changing Through Bereavement of a Loved One
- Ikuro SUZUKI ..... 21  
Understanding the Value of Grief
- Mao NAKA ..... 35  
Considering Loss Based on Children's Experience

### Workshop for Gender Equality and Early Career Researcher Support

- “Philosophy and Ethics as Liberal Arts: What and How Early Career  
Researchers Teach” ..... 55
- Speakers: Naohiko MIMURA, Yu MIYAHARA, Koichi WATANABE  
Organizer: Yuto KANNARI

### Invited Article

- Jussi BACKMAN,  
Transcendental Idealism and Strong Correlationism: Meillassoux and the End of  
Heideggerian Finitude (Translated by Yuto KANNARI) ..... 65

### Articles

- Ryosuke OUCHI ..... 87  
The Paradox of Pain: The Impossibility of Its Phenomenological Resolution in the  
Lived-Body
- Hiroki NAKATANI ..... 103  
The Problem of Normality in Early Derrida's Reading of Husserl

## Essays

Shigeru TAGUCHI .....	119
In Memoriam: Klaus Held (1936–2023)	
The Legacy of Professor Held	
Asuka SUEHISA .....	123
In Memoriam: Klaus Held (1936–2023)	
Homeworld, Alienworld, the One World: Remembering Professor Held	
Takashi IKEDA.....	127
First Ten Years of the Gender Equality and Early Career Researcher Support Working Group	
Izumi NONOMURA .....	135
The 48th Annual Conference of the International Merleau-Ponty Circle. A Report	

## Book Reviews

Shintaro AKASAKA .....	141
Helen Ngo, <i>The Habit of Racism. A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment</i> (Japanese Translation, Seidosha, 2023)	
Ayuto OGAWA.....	147
Daisuke Kamei, Masumi Nagasaka, Kimiya Mineo, Keisuke Kato, Motoki Saito, and Norihide Sudo, <i>Reading Derrida's Lectures on Heidegger</i> (Hakusuisha, 2023)	
Kenta KODAIRA .....	155
Yuko Ishihara & Steven A. Tainer	
<i>Intercultural Phenomenology: Playing with Reality</i> (Bloomsbury, 2023)	
Amane WATAHIKI .....	163
Yutaka Tomiyama, <i>Husserl. Philosophy of Intentionality</i> (Seidosha, 2023)	

## Backmatter



## 超越論的観念論と強い相関主義

——メイヤスーとハイデガー的有限性の終焉<sup>1</sup>

### Transcendental Idealism and Strong Correlationism: Meillassoux and the End of Heideggerian Finitude

ユッシ・バックマン (Jussi BACKMAN)

訳：金成 祐人 (Yuto KANNARI)

今日、哲学的立場としての超越論的観念論は、このアプローチのカント、フィヒテ、シェリング、フッサールのそれぞれかなり違いのあるバージョンに主に関連するドイツ哲学の歴史的潮流として、過去のものとなされるのがほとんどである。しかし同時に、カントの「コペルニクス的転回」がもたらしたこの成果が、ハイデガーに至るまでの、そしてハイデガーを含む現代哲学の流れを、おそらく他のどのアプローチよりも決定的に形作ってきたことに異論を唱える者はほとんどいないだろう。その遺産は明らかに、必ずしも十分に認められてはいない仕方で現代思想に影響を及ぼし続けている<sup>2</sup>。

近年、カント的な超越論的遺産の根強い優勢に対する新たな哲学的激変が、フランスの知的環境から英語圏へと広がっている。この広がりには決定的な影響を与えたのが、2006年にフランスで出版され、2008年に『有限性の後で——偶然性の必然性についての試論』として翻訳されたカンタン・メイヤスー (2006b) の比較的短い著作である。この著作の序文でメイヤスーの師であるアラン・バディウは、同書は現代の哲学的文脈にまったく新しい思考の道を導入するものにほかならないと主張している。つまり、カントが挙げた三つの支配的な近代の選択肢、すなわち独断哲学、懐疑哲学、批判哲学に対抗する、カント以後の新しい選択肢である (Badiou 2006a, 11/vii)<sup>3</sup>。メイヤスーはこの選択肢を「思弁的唯物論」と呼んでおり、そのさい「思弁的」という形容詞はその絶対的な範囲を強調し、この唯物論を他の「素朴」唯物論、「独断的」唯物論、「史的」唯物論から区別している。

メイヤスーの著作の偉大な功績のひとつはまさに、カントの「コペルニクス的転回」以降にとりうる主要な哲学的立場を洞察に満ちた仕方で再構成していることである。ヒュームが実体に関する古典的な独断的形而上学を懐疑的に攻撃し、カントが批判的な反応を示した後、哲学の主流となる選択肢は、ほぼ間違いなくまず一方ではヒュームの遺産である懐疑的な反形而上学的立場 (経験主義、実証主義、自然主義) から成り立っており、もう一方では、カント的な批判的・超越論的遺産の様々な展開 (ドイツ観念論、新カント派、現象学とその後継者たち、構造主義、ウィトゲンシュタイン的言語哲学) から成り立っている——ドゥルーズの「超越論的経験論」のような両者を独創的に組み合わせるものは言

うまでもない。メイヤサーによれば、カント的な道は基本的に、彼が相関主義と呼ぶもののさまざまな形態を横断してきた。相関主義とは、「私たちは思考と存在の相関にのみアクセスすることができ、他方から切り離されて考えられるどちらの項にも決してアクセスすることはできないという考え方」(Meillassoux 2006b, 18/5)の乗り越え不可能な性格、さまざまな仕方で肯定する一般的なアプローチである。そのため、「観念論」が独断的な意味で理解されるにせよ超越論的な意味で理解されるにせよ、「相関主義」は「観念論」よりも広範で包括的な区分となっている。観念論者とは異なり、相関主義者は、存在を必ずしも意識の作用や意味構成という主観的過程に引き戻そうとするのではなく、思考との還元し得ない相関を欠いた存在の概念はどれも、認識論的にアクセス不可能であるか、あるいは単に支離滅裂である——存在という相関項との還元し得ない関係を欠いた思考の概念はどれも同様である——という見解をとるだけである。メイヤサーが言う相関主義者にとって、存在とは思考に対する有意味な所与性であり、思考とは有意味な存在に対する受容性である。

以下で私が試みようとするのは、グレアム・ハーマンによって「カント以後の思想の非常に印象的な要約」(Harman 2007, 105)と評される「相関主義」こそが、メイヤサーがハイデガーを或る種の究極的な、あるいは最後のカント主義者として描くことを可能にしている概念上の革新に他ならないと示すことである<sup>4</sup>。メイヤサーにとって、ハイデガー的な有限性と事実性の解釈学は、超越論的観念論の伝統内での現代的な頂点であり、それ自体もはや「超越論的」とも「観念論者」とも問題のない仕方で特徴づけることのできない急進的な立場である<sup>5</sup>。まず、「相関主義」の主な類型、特にその「強い」種類についてのメイヤサーの説明を簡単に紹介し、次に、メイヤサーがハイデガーをカント的な超越論的枠組みのなかに位置づけるさいのやや大ざっぱな仕方を具体化することによって、「[相関主義]やその「強い」種類といった」これらのレッテルがハイデガー的アプローチをどの程度正当に評価しうるかを吟味する。メイヤサーは、すべての重要な哲学的展開には哲学史の新たな明確化が必要であるというヘーゲルとハイデガーの格率に従っている。そこで私は、メイヤサーがハイデガーを強い相関主義者として読み解くことが、メイヤサー自身の思弁的体系論——ハイデガーの立場の論理的止揚 [Aufhebung] のようなものとして提示される——にとってきわめて重要であるのはなぜなのかを示すことで、結論としたい。メイヤサーはハイデガーをテコとして効果的に用いて、カント的遺産全体を乗り越えようと試みているのである。

## 1 弱い相関主義と強い相関主義

メイヤサーは、相関主義を「弱い」ものと「強い」ものの二種類に大別し、これらに続



く二つの思弁的思考様式、すなわち思弁的（あるいは絶対的）観念論と思弁的唯物論をそれぞれ対応させている。この図式では、カントの超越論的観念論は相関主義の弱い形態として提示される。それによれば、私たちは実在が現象的で経験的である限りにおいてのみ、つまり、私たちの認識能力の超越論的構造（感性と悟性）と相関する限りにおいてのみ、実在にアクセスすることができる。「物自体」ないし「超越論的対象」の非相関的で絶対的な領域の概念は、諸現象の現象しない原因として、カントにとっては相変わらず理解可能なままである。たとえ、私たちがそのような概念のいかなる肯定的な内容にも経験的ないし認識的にアクセスすることができないということが、批判哲学の基本原則であるとしても、である——それゆえ、「物自体」ないし「超越論的対象」の理解可能性を認めることが] カント的相関主義の「弱さ」なのである (Meillassoux 2006b, 42, 43, 48–49/30, 32, 35–36)<sup>6</sup>。しかし、カントの立場はまもなく、ドイツ観念論者たちによって思弁的に絶対化されることとなった。思弁的観念論は、思考の相関項でない実在にはアクセスできないという基本的なテーゼを保持しながらも、それを思考の限界に関する批判的テーゼとして解釈する必要はないと付け加えた。つまり、超越的な「物自体」という概念でさえすでに知的抽象であり、本質的に相関に内在するものであるため、結局のところ矛盾するものとして克服されねばならないのである<sup>7</sup>。その代わり、相関そのものが絶対化される。すなわち、私たちは、精神としての主観性の、意識的で自己意識的な、理性的で概念的な活動の実例として自分自身を認識することを通じて、絶対者にアクセスすることができるのである<sup>8</sup>。興味深いことに、メイヤスはヘーゲルとシェリングに加えて、ショーペンハウアー、ニーチェ、バルクソン、ドゥルーズについても、意志、力への意志、生といったさまざまな見出しのもとで相関を絶対化する思想家として言及している (Meillassoux 2006b, 26–27, 51–52, 71/10–11, 37–38, 51–52)。メイヤスの或る発言は、フッサールもこの区分に含まれることを示唆しているが、この点については曖昧なままである (Meillassoux 2006b, 169/122)。

他方の「強い」相関主義モデルは、ヘーゲル以後、ニーチェ以後の展開である。このモデルは、超越的な実在のいかなる概念も理解不可能なものとして放棄しなければならないという思弁的観念論に同意している。つまり、「思考」が理解可能性に対するあらゆる種類の受容性という可能な限り広い意味で理解されるならば、「存在する」ということは、「思考の相関項として与えられる」ということを意味する。しかし、これに加えて、強い相関主義は相関それ自体さえも非絶対化し、ヘーゲルに反して、意味と意味構成の相関構造をいかなる絶対的に必然的な原理からも導き出すことはできないと主張する<sup>9</sup>。そうした構造は単に、私たちの有限な、状況づけられた事実性の不可避の条件として受け入れられねばならない。このように、強い相関主義は、哲学が絶対的に必然的な妥当性要求をとまなう言明をなす能力を、全面的に否定するのである (Meillassoux 2006b, 42, 50–58/30,

36-42)。非絶対的で間主観的な普遍性の概念を堅持しようとする強い相関主義者もいるが（メイヤスはハーバーマスとアーペルのコミュニケーション的合理性を念頭に置いているようだ）、「ポストモダン」の変種（おそらくジャンニ・ヴァッティモの「弱い思考」の概念に最も明確に示されている）は、哲学が自らの特定の歴史的・文化的状況を超越し、普遍的に妥当な言明を行う能力すら哲学に認めないだろう（Meillassoux 2006b, 58-59/42-43）。強い相関主義モデルの主要な支持者として、メイヤスはハイデガーとウィトゲンシュタインを選び出している（Meillassoux 2006b, 56-67/41-48）<sup>10</sup>。

絶対的に必然的な存在者や存在様式という観点から実在性を考える様式としての「形而上学」というハイデガー的な概念——ハイデガーが存在神学と呼ぶ基本的にアリストテレス的なアプローチ——を巧みに扱って、メイヤスは強い相関主義がもはやまったく「形而上学的」な立場ではないと指摘している（Meillassoux 2006b, 56-67/41-48）<sup>11</sup>。まさにこの理由から、メイヤスにとって強い相関主義は最も現代的で重要なアプローチであり、また、相関主義の枠組みを完全に論駁するために、その暗黙の前提と思われるものを逆手に取ることによって、急進化し、乗り越えようとするアプローチでもある。しかし、メイヤスの主な議論はひとまず脇に置いておき、超越論的伝統のなかにハイデガーを位置づけるためのひな型として、メイヤスのさまざまな相関主義的立場の明確化を、とりわけ「強い相関主義」と彼が表現したものを利用することにしよう。

## 2 超越論的観念論から強い相関主義へ——カント、フッサール、ハイデガー

ここで注意すべきなのは、文字通りの意味での「超越論的哲学」は、近代だけの概念ではないということだ<sup>12</sup>。「超越論的」という表現は、アリストテレスの存在 (*to on*) と一 (*to hen*) に関する記述を、「存在すること」のあらゆる可能な事例に適用され、したがって存在者の最も一般的な範疇や類さえも「超越する」、共外延的で絶対的に普遍的な規定とした中世の解釈に起源がある<sup>13</sup>。それゆえに、スコラ哲学者たちは、このような超範疇的な概念を「超越範疇」(*transcendentia*、後期スコラ哲学では*transcendentalia*)と呼んだ。ドゥンス・スコトゥスが言うように、形而上学とは、存在者としての存在者の最も一般的な学という意味で、「超越範疇の超越的な学 [*transcendens scientia de transcendentibus*]<sup>14</sup>であり、あらゆる限定された範疇や種類を超えることを目指す学である。この意味で、形而上学はアリストテレス以来ずっと「超越論的」学と理解されてきたのであり、カント自身、「古人たちの超越論的哲学」について語っている（Kant, CPR B 113）<sup>15</sup>。コペルニクスの転回とは、何よりもまず、対象の超越論的構造のすべてまたは一部が、認識的にアクセス可能な実在自体の構造であるという古典的形而上学の「独断的」前提から、それらを相関の構造、すなわち思考が自らに与えられたものを受け入れ組織化する仕方の構造とみなす超



超越論的観念論のアプローチへの転換である。ハイデガーは、カントにとって超越論的哲学とは、形而上学の批判的で非独断的かつ非思弁的な形態の名称であり続けていることを強調している (Heidegger 1988, 16–17/11)。『純粹理性批判』の初版において、カント (CPR A 11) は、対象の経験の可能性のアプリオリな条件の学が、対象の可能性の条件の学であること、すなわち、超越論的に構造化された経験的実在が、対象性そのものであることを指摘している。対照的に、カントの「超越論的对象」は、人間の感性の受容的で本質的に有限な本性を説明するために必要な、経験の所与性の先対象的な原因である (Kant, CPR A 494; B 522)。

フッサールの『論理学研究』におけるアイデアの対象性と範疇的直観の説明は、直観的所与性の領域を感覚的経験に限定する傾向のあるカント主義や新カント派のアプローチから重要な点で逸脱している。フッサールもまた感覚的直観を直観の最も基本的な形態とみなしているが、彼が示しているのは、経験のアイデア的で非感覚的な側面と構造が、対象性自体としても志向される比較的独立した領域を構成することである (Husserl, Hua 19/2, 657–693/271–294)。カントが意味作用と直観作用とを区別することに、つまり対象を志向することとその直観的な自己所与性とを区別することに基本的に失敗しているために、カントは範疇的なアイデア的なものの自己所与性を認識することができなかったとフッサールは指摘する (Husserl, Hua 19/2, 731–733/318–319)。さらに、カントとその追従者たちは、現象学的還元という適切な方法を欠いており、したがって、関連する基本的な諸概念と諸原理の構成に関する適切な記述的分析に超越論的プロジェクトを基づかせることができてはいない<sup>16</sup>。

しかし、こうした根本的な相違にもかかわらず、フッサールは『論理学研究』のなかで、カントに実のところ「かなり親近感」を感じていると述べている (Husserl, Hua 19/2, 732/319)。カントの取り組みとのこの連帯が深まることで、『論理学研究』(1900–1901)から『イデー』第1巻(1913)にかけて、フッサールの「超越論的転回」として知られるものが成立した。現象学はいまや、カントが取り組んだものの、その方法論的・概念的な欠点や伝統主義のために完成できなかった超越論的プロジェクトとますます同一視されるようになった。フッサールにとって「超越論的哲学」とは、「デカルトを通して、あらゆる近代哲学に意味を与えている [……]、あらゆる認識形成の究極的な源泉に立ち帰って探究するという [……]、認識者が自分自身と自らの認識する生を熟考するという [……]、原初的な動機」(Husserl, Hua 6, 100/97)の名称である。「究極的な源泉」としての自我のこうした「認識する生」に純粹に基礎づけられるがゆえに、真に超越論的な哲学は「究極的に基礎づけられた」ものである。それによって、世界の「真の存在」は「私自身の認識形成のうちで」認識されることになる (Husserl, Hua 6, 101/98)<sup>17</sup>。

カントにとって、アクセス可能性の超越論的構造は、アクセス可能でないもの(超越的

なもの)とアクセス可能なもの(内在的なもの)との間を「媒介する」。しかしフッサールにとって、主観性の「超越論性」は、世界を相対的に超越的なものとして、つまり、意識に対する直接的で純粹に内在的な現前をつねに超える領域として構成する主観性の能力にこそ関係している(Husserl, Hua 1, 65/26)<sup>18</sup>。したがって、あらゆる認識の「原因」あるいは「究極的な源泉」は、相関そのものであり、「哲学の真に徹底的な基礎づけ」は、「あらゆる客観的意味形成と存在妥当の原初的な場 [Urstätte] としての認識する主観性」(Husserl, Hua 6, 101-102/98-99)への回帰にある。超越論的現象学は、カントの弱いバージョンの相関主義に内在する経験的な——人間学的で心理学的な——痕跡を断ち、意味の「原初的な場」としての相関を絶対化することによって、真の超越論的観念論の要件を満たす。

考えられる意味のすべて、考えられる存在 [Sein] のすべては、内在的と呼ばれようと超越的と呼ばれようと、意味と存在を構成する主観性としての超越論的主観性の領域内にある。[……]このような体系的具体性をもって遂行されるなら、現象学は、根本的かつ本質的に新しい意味においてではあるが、それ自身「超越論的観念論」である。それは [……]、少なくとも限界概念として物自体の世界の可能性を開いておくことができると信じるカント的な観念論ではない。(Husserl, Hua 1, 117-118/84-86)

絶対的基礎に関する絶対的に普遍的な学の探求を達成するためには、考えられるあらゆる有意味な存在を包含する絶対的超越論的主観性の概念が必要である。フッサールは『危機』のなかで、この探求は近代の偉大な哲学的伝統によって私たちに受け継がれてきたものであり、もしこの課題を放棄しようものなら、私たちはもはや真剣な哲学者であり続けることはできない、と説いている(Husserl, Hua 6, 15/17)。したがってフッサールは、メイヤスー的な意味で絶対的観念論の範囲に含まれねばならない。それはつまり、カント的な弱い相関主義を絶対化した、もはや超越的な「物自体」を認めないバージョンの絶対的観念論ということである。これはある程度まで、ハイデガーが「哲学の終焉と思索の課題」(1964年)で行った挑発的な主張に対する譲歩である。この主張とは、フッサールの現象学的方法がヘーゲルの思弁的弁証法とはかけ離れたものであったとしても、「問題の核心」(事象そのもの)はヘーゲルにとってもフッサールにとっても、絶対的主観性、つまり絶対化された相関なのだというものだ(Heidegger 2000b, 69-71/62-64)。

実際のところ、ハイデガーの小論のタイトル「哲学の終焉と思索の課題」は、近代的超越論的プロジェクトを放棄することは、古典的哲学的プロジェクトそのものを放棄することを意味するだろう、というフッサールの忠告を確認しているように見える。しかしハイデガーにとって、古典的哲学の終焉は決して思索の終焉を意味するものではない。ハイデ



ガーから見れば、絶対的に普遍的な学の探求は、西洋思想の歴史的な一局面に過ぎず、その局面に内在する限界はいまや明白になりつつある。そして、ハイデガーの後期思想は、まさに古典以後の思索の「別の始まり」の可能性に関係している。そのような潜在的な思考形態の基本的な方法と動機を説明するために、「超越論的」という用語は少なくとも重要な制限を必要とする。

周知のように、ハイデガーは独立したキャリアの最初から、フッサールの超越論的主観性および超越論的還元という概念に批判的であった<sup>19</sup>。その主な理由は、これらの概念が、固有の事実性、すなわち、現存在〔*Dasein*〕としての人間の歴史的に状況づけられているあり方、文脈特異性、一回性を無視する危険性があるという懸念であった。しかし、或る意味で「超越論的還元」は、真の哲学研究に不可欠な動向を指し示している。これは要するに、すでに構成された客観性から、有意義なものとしてそれらを構成する過程への転回であり、ハイデガー流に言えば、存在者的アプローチから存在論的アプローチへの転回であり、特定の存在者からその存在への転回である (Heidegger, GA 24, 29/21)。存在者 (*Seiendes*) という観点からすれば、存在 (*Sein*) は「超越論的」である。

哲学の根本主題として、存在〔*Sein*〕は存在者〔*Seienden*〕の類ではないのだが、すべての存在者に関わる。存在の「普遍性」は、より高次の領域に求められねばならない。存在と存在構造は、すべての存在者と、存在者がもちうるすべての可能な特性を超えている。存在とは、純然たる超越者である。現存在の存在の超越は、そのうちに最も徹底的な個体化の可能性と必然性があるかぎり、際立った超越である。存在を超越者として開示することはすべて、超越論的認識である。現象学的真理 (存在の開示性) は超越論的真理である。(Heidegger, SZ, 38/35–36; 訳文変更)

ハイデガーはここで、超普遍的な超越者としての存在というアリストテレス的・スコラ哲学的概念に立ち戻ったように見える。しかし、「普遍的」という語を囲む引用符が示すように、「超越」と「超越論的」はここでは明らかに伝統的ではない意味で使われている。存在とは、最大限に普遍的なものが特殊を超越するような仕方では存在者を超越するのではなく、有意義な経験のテンポラルな〔temporal〕地平や文脈が、その経験の現前の焦点を超越するような仕方では、存在者を超越するのである<sup>20</sup>。『存在と時間』の既刊部分の主な目的は、存在と思考の相関が現存在の脱自的にテンポラルな構造にどのように基づいているかを示すことである。現存在の世界と自己自身にかかわる、その最も「本来的な」(*eigentlich*)、あるいは存在論的に原初的な様態において、現存在は、具体的な状況の枠組みのなかで、つまり、既往 (*Gewesenheit*) という特異な事実的背景から生じる特異な将来の可能性 (*Zukunft*) という文脈のなかで、有意義性の一時的「瞬間」(*Augenblick*)

としての現在に遭遇する<sup>21</sup>。この文脈特異性こそ、引用箇所ではハイデガーが言及した「徹底的な個体化」である<sup>22</sup>。現存在の文脈的構造、すなわちその「時間性」(Zeitlichkeit)は、存在そのものの文脈的構造、すなわちその「テンポラリテート」(Temporalität; Heidegger, GA 24, 436/307)と相関している。このテンポラリテートは、存在そのものの「意味」(Sinn)と究極的に同一であるものとして開示されるものであった。いかなる有意味な現前も、一回的でテンポラールな状況の動的な文脈においてのみ、有意味なものとして現存在に開示され、それによって「意味をなす」のである。

私たちは存在を[……]テンポラリテート[Temporalität]へと企投する。[……]あらゆる存在論的命題はテンポラールな[Temporal]真理、veritas temporalisという性格をもつ。[……]超越はそれ自身、時間性[Zeitlichkeit]に根ざしており、したがってテンポラリテート[Temporalität]に根ざしている。それゆえ、時間は超越論的な学、すなわち存在論の第一次の地平であり、あるいは簡潔に言えば、超越論的地平なのである。(Heidegger, GA 24, 459-460/323; 訳文変更)

存在のこのような文脈特異的な開示は、何らかの絶対的でイデア的な存在においてイデア的に例示され、それ自体はテンポラールで文脈的な規定を超えたままであるような、普遍的な「存在そのもの」の特定の例示ではない。そうではなく、存在の意味とは、一回的な意味-状況を生み出す文脈化と一回化であり、それによって、存在(意味の所与性)と思考(意味に対する受容性)とを共属させるのである——後期ハイデガーが性起の出来事[Ereignis]と呼ぶことがよく知られている、出来事ないし「起こること」である<sup>23</sup>。

ハイデガーは後年の著作で、「超越」や「超越論的」のみならず、「脱自」や「実存」といった用語を、誤解を招く可能性があるとして結局は捨て去った<sup>24</sup>。後に『存在と時間』が依然として形而上学の言葉に染まっていたとハイデガーが指摘するとき、何よりもまずこれらの表現を念頭に置いているのは間違いない(Heidegger 1996, 328/250)。ハイデガーの基本的な狙いは、後に地平に向かって「超越」されたり「乗り越え」られたりするような、意識に対する直接的かつ内在的な現前の原初的な点などないことを示すことである。むしろ、有意味な経験的状況の焦点は、その状況の唯一的な意味-文脈を構成する複合的な指示連関の、一回的で状況的な交差としてのみ生じるのである<sup>25</sup>。性起の出来事としての存在は、アリストテレス的な意味での特定の存在者の「超越論的」特徴ではない。存在と存在者は、もはや普遍と特殊という意味で対立するのではない。つまり、ハイデガーがその最近[になって公刊された]テキストのいくつかで示しているように、存在と存在者との間の「存在論的差異」さえも、存在そのものの動性のための仮の呼称に過ぎなかったのである<sup>26</sup>。性起の出来事だけが、存在の出来事だけがある。厳密に言えば、存在がそこ

に起こりつつある、存在の主体、物、実体は存在しない。存在者は存在の一側面であり、有意味性の一時的な経験的状況の文脈化における焦点である。そして、焦点とは定義上、文脈から離れては考えられないものである<sup>27</sup>。有意味性の一時的な諸々の出来事の一つの「普遍的な」特徴は、それらが継承、連続性、相対的変容という歴史的伝統をたしかに形成しているにもかかわらず、その文脈的具体性のすべてにおいて、そうした諸々の出来事は唯一的であり、一回的であるという構造的特徴である<sup>28</sup>。

しかし、メイヤスーもダニエル・ダールストロームも指摘しているように、少なくとも一つの重要な意味では、ハイデガーはたしかに最後まで超越論的観念論の継承者であり続けた。その意味とは、性起の出来事が存在と思考の相関を表す名称であり続けているということである(Dahlstrom 2005, 47-51; Meillassoux 2006b, 22/8)<sup>29</sup>。性起の出来事は、存在と人間との「共属」(Zusammengehören)、つまり、両者の還元不可能で分かちがたい相互関係を示している。存在の完全に非実体化された性起の出来事、つまり意味の時間的に位置づけ一回化する文脈化という動的なプロセスでさえも、有意味な所与性の出来事であることに変わりはなく、したがって受け手、つまり受容的な次元から独立して考えることはできない。しかし、「絶対者」とは文字どおりそれ自身以外のものとのあらゆる構成的関係や指示から完全に「解放された」純粋に自己充足的な自己同一性を意味するがゆえに、性起の出来事としての相関は絶対化に抵抗する<sup>30</sup>。性起の出来事はそれ自身と決して「同一」ではないため、絶対的ではありえない。存在と思考の相関が性起の出来事として考えられるとき、その相関のどちらの側面も、永続的に同一のプラトンのイデアやカント的超越論的主観、つまりあらゆる可能な表象に同一のものとして暗に伴っている「私は考える」のような、永続的な自己同一性として考えることはできない。そうではなく、性起の出来事としての存在とは、有意味な現前のあらゆる所与性と受容性の徹底的な非絶対性——異質性、文脈性、比類なさ、一回性——を表す名称である<sup>31</sup>。これはハイデガーが1957年に行った講演「同一性の命題」において明確にしようと努めていることであり、この講演はおそらく、性起の出来事としての存在についての彼の決定的な声明であり、強い相関主義に関する重要なテキストである。ここでは、あらゆる構成された同一性は、パルメニデスが示した根本的な同一性、すなわち思考(*noein*)と存在(*einai*)の同一性に起因する。存在が性起の出来事として考えられるとき、今度はこの同一性は、もはや絶対的な自己同一性としてではなく、むしろ相関の異質で一回的な出来事の構造的特徴と見なされる。

私たちは、人間と存在[*Sein*]が互いに適合しあう[*einander geeignet sind*]この適合[*Eignen*]を単純に経験しなければならない、つまり、私たちが性起の出来事[*Ereignis*]と呼ぶもののなかに入っていかなければならない。[……]この語[すなわち*Ereignis*]は、いまでは*singulare tantum*[つまり、単数形のみで用いられる名詞]として用いられている。この語

が示すことは、単数形 [Einzahl] においてのみ、いや、いかなる数においてもではなく、唯一的に [einzig] 起こることである。[……] 性起の出来事は、人間と存在とをそれらの本質的な一体性に明け渡す [veraignet]。[……] 形而上学の教義は、同一性 [Identität] を存在の根本的な特徴であると述べる。いまや、存在は思考とともに、その本質 [Wesen] が、私たちが性起の出来事と呼ぶ共に存在させることに由来する同一性に属していることが明らかになった。同一性の本質は性起の出来事の所有物 [Eigentum] である。(Heidegger 2002, 24, 25, 27/36, 38, 39; 訳文変更)

性起の出来事は、すべての存在者、有意味な現前のすべての一回的な瞬間が、文脈化されるという意味で「根拠づけられ」、それによって徹底的に一回的な仕方では意味のあるとされる相関の出来事である。そのようなものとして、性起の出来事それ自身はもはや「根拠づけられ」えず、さらなる「根拠」や「理由」を与えられえない。相関がともかく起こること、有意味な所与性がともかくあることは、徹底的に事実的である。つまり性起の出来事は、特定の存在者に対してのみ問われうる「なぜ」という問いに抵抗する。「性起の出来事 [Er-eignis] となぜの可能性! 『なぜ』は、なおも存在 [Seyn] が置かれるべき法廷とされうるだろうか。[……] なぜ存在なのか。存在それ自身の内側から。[……] 無—根拠的な [grund-los]; 底知れぬ [abgründig]。」(Heidegger, GA 65, 508–509/400; 訳文変更)

### 3 強い相関主義から思弁的唯物論へ——メイヤスの可死性からの議論

自らの思弁的立場を明確にする際、ハイデガーの強い相関主義の暗黙の前提から展開するものとしてその立場を提示するのが、メイヤスの戦略である。結局のところ、この〔ハイデガーの強い相関主義の〕アプローチが絶対的な原理を完全に放棄することは不可能であり、それどころか、暗黙のうちにこうした原理を前提としているとメイヤスは主張する。カントの〔相関主義の〕弱いバージョンが、その基本原理、すなわち思考と存在の不可分性(メイヤスは「相関項の第一次性」と呼ぶ)の絶対的観念論による絶対化にとりつかれたように、ハイデガーの「強い」相関主義は、その追加的な第二原理(「相関の事実性」)の絶対化にとりつかれる。その第二原理によれば、相関関係が起こることはそれ自体、絶対的な根拠のない事実的で一回的な性起の出来事なのである。

相関的循環の猛威に耐えることのできる絶対的なものが考えられるとすれば、それは強いモデルの第二の決定、すなわち事実性の絶対化から生じるものでしかありえない。[……] したがって、なぜ絶対者を構成するのが相関ではなく相関の事実性であるのかを理解しようとし



なければならない。(Meillassoux 2006b, 71-72/52)

この事実性の絶対化こそが、思弁的唯物論が求める「非形而上学的な絶対者」なのである (Meillassoux 2006b, 70/51)。メイヤサーがそれを通じて思弁的唯物論を成し遂げようとする具体的な論拠は、可死性に関連している。ハイデガーの基礎的存在論において、自分自身の意識をつねに自覚するという意味でのカントの超越論的統覚とは、死へとかわる存在 (*Sein zum Tode*)、つまり、自分自身の経験的地平が完全に不在であるという不断の可能性を自覚することによって修正され、補完される。「私は考える」という事実の自覚は、「私は死ぬことができる」という事実の自覚に差し向けられ、この自覚によって初めて、具体的で、状況づけられた、有限な「私」として、現存在は個別化されるのである (Heidegger, SZ, 260-267, 316-323/249-255, 302-309)。こうして可死性はまさに、あらゆる有意義な思考を構成する有限性と非絶対性の「保証」として機能する。

可能性としての自分自身の死とのこの構成的な関係は、ハイデガーの強い相關主義と絶対的観念論とを最も明確に区別している。フッサールにとって、死は経験的な出来事、つまり経験的な個人の事実的な生の停止でしかありえず、思考がそれ自身の可能性に対してもつ、超越論的で構成的な関係では決してない。「生き続ける過程と生き続ける自我は不滅である——注意せよ。これは純粋な超越論的自我であって、死ぬことが大いにありうる経験的な世界—自我ではない。」(Husserl, Hua 11, 378/467) しかし、「死へとかわる存在」というハイデガーの概念は、すべての「生き続ける」ことが、まさにそれ自身の停止、それ自身の不在という不断の可能性によって構造化され、まさにそれによって、自分自身の有限で一回的な将来の地平へと個体化されることを含意している。もちろん、この不在が経験的にそのようなものとして与えられることは決してなく、したがってそれ自体「思考不可能」であるとしても、その可能性、すなわち不可能性の可能性——自らの諸可能性の地平の完全な不在の可能性——は、究極的な可能性として、すぐれて思考可能である。現存在にとって死とは、もっぱら可能性としてのみ経験され、眼前的な現実として経験されることは決してないという点で、純粋で究極的でこの上ない可能性である。それは実存的な時間の内部で現実化されることは決してなく、まさに時間の限界として機能する<sup>32</sup>。この意味で、死へとかわる存在の説明は、現在よりも将来が存在論的に優位であるというハイデガーの主張の不可欠な一部なのである。死とはまさに、現在では決してありえない将来であり、諸可能性の開かれた次元としての現存在の将来性の、つねに開かれた極限であり、あらゆる可能な現実を凌駕する可能性である。

ここで、メイヤサーの思弁的議論が登場する。それは、[カントの] 批判哲学に対するヘーゲルの批判の基本的な前提を共有している。その前提とは、ひとたび限界が限界として認められると、それはすでに超越されている、つまり、人はすでに限界を超えたところ

にあるものとの関係を確立している（Hegel, GW 20, §60, 97/107）という前提である。自分自身の死を自分自身の諸可能性の限界として経験することは、その限界を超えたところにあるもの、すなわち自らの諸可能性の完全な不在をすでに取り込んだことを含意する。言い換えれば、死の不断の可能性は、概念的にその現実化に依存している——それこそハイデガーが否定していることである。思考の有限性と限界について考えるとき、カントは実際にはそうした限界を絶対的な領域へとすでに踏み越えていたとドイツ観念論者たちが主張したのと同様に、相関の有限性について考えるとき、強い相関主義者は実際には現象的意味の相関的領域を絶対的な非相関的領域へとすでに踏み越えていたとメイヤサーは主張する。この議論によれば、ハイデガー主義者がフッサール主義者から——より一般的には強い相関主義者が絶対的観念論者から——可死性の問題に関して自らを一貫して区別する唯一の方法は、すべての思考する自我が、自我を含まず、それゆえ自我の思考の相関項として考えられえない現実の实在性の可能性と構成的な関係をたしかにもつことを認めることである。そこからこの可能性が取り出されうるような、自我性の超越論的レベルなどない。

しかし、これらの状態 [すなわち、可死性、無化、死んでまったく別様になること] は、どのようにして可能性として考えられるのだろうか。私たちが存在する理由が何もないために、私たちを消滅させる、あるいは私たちを根本的に変容させることのできる別様である可能性 [capacity-to-be-other] を、私たちは考えることができるという事実によってである。しかし、もしそうだとすれば、この別様である可能性は、まさに私たち自身の非存在の可能性をはらんでいるのだから、私たちの思考の相関項として考えられえない。[……] もし私が、私の非存在の可能性は、私の非存在の可能性を考えるという私の行為の相関項としてのみ存在すると主張するならば、私はもはや私の非存在の可能性を考えることはできない。これはまさに、[絶対的] 観念論者が擁護するテーゼである。[……] このように、[強い] 相関主義者の観念論に対する反駁は、事実性の思考において前提とされる別様である可能性の [……] 絶対化によってなされるのである。（Meillassoux 2006b, 77-78/57）

メイヤサーによれば、このことは事実上、強い相関主義者に、思考と存在の相関を、単に事実的なもの、つまり何らの絶対的な必然性もなく与えられたものとしてだけでなく、実に偶然的なもの、つまり、存在しないことも等しく可能なものとみなしていることを認めさせることになる。しかし、このことを認めるということは、すべてのものを、つまり相関そのものだけではなく相関の内部にある实在性のすべての意味ある開示を、根本的に偶然的なもの、つまりそれが [いま現に] ある通りではない可能性によって絶えず構造化されたものとして究極的には考えることを認めることになる。さらに、論理的一貫性は、

この偶然性そのものを、単に事実問題としてではなく、絶対的なものとして実際に考えることを要求する。なぜなら万物の偶然性がそれ自身偶然的であると主張することは、再び絶対的な偶然性を呼び起こすことによって、無限後退を招くことになるだろうからである (Meillassoux 2006b, 78–81/57–59)。万物の根本的な偶然性以外は何も絶対的なものとして考えられえず、実際、万物の根本的な偶然性は絶対的に必然的なものとして考えられねばならない、と議論は続く。相関や何か他の存在者や存在の領域を絶対化することを拒むと、強い相関主義者には、相関の偶然性や他のすべての存在者の偶然性や存在の領域の偶然性を絶対化し、思弁的唯物論者になる以外に首尾一貫した選択肢は残されていない (ここで「唯物論」は、思考の相関項ではない存在の概念のアクセス可能性を主張する相関主義を否定するという、非常に広い意味で理解されている)。他方、偶然性を絶対化することを拒否すれば、強い相関主義者は相関を絶対化し、絶対的観念論者にならざるをえなくなるだろう (Meillassoux 2006b, 81–82/59–60)。言い換えれば、何らかの特定の存在者や存在の様態を「存在神学的」に絶対化することをポスト形而上学的に放棄することは、究極的には、実在性のいかなる側面も絶対的に必然的であることが判明することは絶対的に不可能である——この不可能性そのものは別で〔絶対的に必然的だと判明する〕——というテーゼを含意する。現象的な有意味性のあらゆる経験は、論理的可能性としての現象的な有意味性の完全な不在を含意すると同時に、このレベルにおいてさえ、偶然性の絶対的必然性の原理が有効であると認識することを含意している——この原理のさまざまな側面を、メイヤスは「非理由 (*irraison*) 律」(それによれば、何ものもそれがそのようであることの必然的な理由をもたない; Meillassoux 2006b, 82–83/60–61) と、「事実論性 (*factualité*) の原理」(それによれば、「存在すること」は必然的に「事実であること」を意味する; Meillassoux 2006b, 107–108/79–80) と呼んでいる。

これこそが、メイヤスの書名が示す「有限性の終焉」なのである。ヘーゲル (そして別の意味ではフッサール) が思考に関するカントの「弱い」有限性の終焉であったように、メイヤスは自らをハイデガーの「強い」有限性の終焉として提示する。彼の議論が示そうとしているのは、結局のところ、思考の領域から絶対性のあらゆる概念を排除しようとする試みは完全な一貫性をもちえないということである。有限性は決して結論ではありえない。つまり、ヘーゲルの言葉を借りれば、「有限なものは制限されたものであり、滅びうるものである。有限なものは有限なものであるにすぎず、不滅のものではない。このことはすべて、有限なものの規定と表現の直接的な眼目である」(Hegel, GW 21, 117/102)。強い相関主義による脱絶対化のプロジェクトは、逆説的に、偶然性、非理由、事実論性という三重の絶対的な原理に係わっていることが判明する。そして同書の終わりに近づくにつれ、メイヤスが構築しているのは——無矛盾性の論理的原理や、単に何もないのではなく何かが存在しなければならないという原理など——あらゆる原理が一つの絶対的な原

理から論理的に演繹可能であるという新しい合理主義的体系にほかならないことが次第に明らかになってくる (Meillassoux 2006b, 91-103/67-76)。彼はたしかに、存在の絶対的なレベルが数学的集合論の或る公理に必然的に適合することを、彼の事実論性の原理に基づいて論証する意図を表明しているが、この論証は後の著作に先送りされている (Meillassoux 2006b, 152-153/110-111)<sup>33</sup>。

メイヤスーにとって、非相関的な存在を考える、非現象的で純粋に形式的な様式がまさに数学なのだから、この論証は重要な課題である。同書の冒頭で彼は、事物の一次性質 (たとえば、空間的な次元や数) と二次性質 (たとえば、味や色) との間の近世的かつ前批判的な区別を復活させる必要性に言及している。それは、後者とは対照的に、前者は測定可能で数学化可能であり、したがって、事物の現象的な性質から離れて、純粋に形式的な仕方と考えられうるというよく知られた理由のためである (Meillassoux 2006b, 13-16/1-3)。メイヤスーはここで、彼の師であるアラン・バディウへの恩義の大きさを明らかにしている。バディウは周知のように、存在論を数学、特に現代の集合論と同一視している (Badiou 1988, 7-39/1-30)。相違点はあるものの、二人の思想家は共通の目標をもっている。それは、カント以後の現象学的な、経験と意味に関連した思考の範疇がもっている覇権を取り払い、カント以前の合理主義を復権させることであるが、これを絶対的に必然的な存在者という形而上学的な概念なしに行うのである (Meillassoux 2006b, 16-18/3-5)<sup>34</sup>。この思弁的な「有限性の終焉」は、彼らにとって、超越論的観念論の遺産がもたらす最終的な結末から、あるいは、思考の脱絶対化がその脱普遍化において頂点に達する現代の「ポストモダン」の袋小路から抜け出す道を約束しているように思われる。したがって、現象学者たちやカントの後継者たちは、メイヤスーの体系のさらなる発展を吟味し、彼の次のような問いの正当性のみならず、その問いに対する可能な答えを検討し始めたいと思うことだろう。すなわちその問いとは、哲学はなぜ、そしてどのようにして、「本来あるべき思弁的唯物論へと断固として向かわずに、超越論的観念論へと陥ってしまった」 (Meillassoux 2006b, 168/121) のであろうか、というものである。



## 原注

- 1 Marko Gylén, Anniina Leiviskä, Simo Pulkkinen, Björn Thorsteinnsson, Gert-Jan van der Heidenの各氏には、本章の以前のバージョンについて有益なコメントをいただいたことに感謝申し上げる。
- 2 一例として、ジャック・デリダが「超越論的観念論の遺産の責任ある守護者」（2003, 188/134）であるよう私たちに促していることは、おそらく示唆に富んでいる。
- 3 カントの区別については、CPR B xxxv-xxxviを参照。
- 4 相関主義の「核心」としてのカント的超越論については、Ennis 2011a, 2011bを参照。
- 5 このような読み方は前例がないわけではないことに留意すべきである。ミシェル・フーコー(1990)は、カント以後の「有限性の分析」と人間学主義における現代のカントのエピステーメーの閉鎖について、同様の説明を示している。これらは最終的に、人間の超越論的側面と経験的側面、あるいは構成する側面と構成される側面の区別を崩壊へと導き、そうすることで来るべきニーチェ的ポストヒューマニズム、すなわち「人間の死」への道を指し示すことになる。バディウ(1989, 54-55/73-74)は、ハイデガーの偉大な業績は、カント的な主観と客観の二分法を克服したことだと考えている。Cf. Žižek (2006, 273): 「ハイデガーの唯一最大の功績は、人間という存在の積極的な構成要素としての有限性を完全に精緻化したことである。このようにして彼はカント哲学的革命を成し遂げ、有限性が超越論的次元への鍵であることを明確にしたのである。」チャド・イングランド(2008)は、ハイデガーはカントを伝統的な形而上学的合理主義を克服するための道筋と見なしていると論じている。Blattner 1994, 1999, 2007も参照。
- 6 「物自体」という概念の理解可能性と必然性に関するカントの議論については、この概念の妥当性は理論的には知ることができないが実践的な根拠に基づいて正当化されうることを示唆しているCPR B xxvi-xxviiを参照。暫定的に「物自体」およびヌーメノン〔*noumenon*〕と同一視される超越論的対象については、CPR A 288-289, 366, 494; B 344-345, 522-523を参照。
- 7 たとえば、Hegel, GW 21, 31/27を参照。「より一貫した〔フィヒテ的な〕形態の超越論的観念論は、批判哲学によって残された、すべての内容から切り離された抽象的な影である実体のない物自体の空虚さをたしかに認識し、それを完全に破壊することを目的とした。」Cf. GW 21, 47/41.
- 8 Hegel, GW 9, 18-25/9-17を参照。
- 9 カントが範疇を導出することに失敗しているとするヘーゲルの批判については、GW 20, §42, 79-80/86を参照。カントにとってのそのような導出の不可能性については、Heidegger 1998b, 55-56/39-40を参照。
- 10 超越論的観念論の継承者としてのウィトゲンシュタインの読み方については、たとえばWilliams 1973; Tang 2011を参照。
- 11 ハイデガーの存在神学に関する説明については、たとえば、Heidegger 1998a, 311-315/207-210; 2002, 31-67/42-74を参照。
- 12 これについては、たとえばAertsen 1998, 1360-1365; 2012を参照。
- 13 Aristotle, *Metaphysics*, B.3.998b22-27; I.2.1054a9-19; K.1.1059b27-34.
- 14 John Duns Scotus, *Quaestiones subtilissimae in Metaphysicam Aristotelis*, prol., n. 5.
- 15 カントの覚書には、「超越論的」が非常に伝統的な形而上学的用語で定義されている。「或る事物をその(事物としての)本質の観点から規定することは超越論的である。」(Kant 1928, 340)
- 16 フッサールのカント批判については、特にHua 6, 93-123, 194-212/91-121, 191-208を参照。
- 17 訳文変更。
- 18 Cf. Carr 2007, 41.
- 19 たとえば、Heidegger, GA 17, 79-81, 273-275/58-59, 210-211; GA 20, 137-139, 150-151, 157-158/100-101, 109-110, 114を参照。ハイデガーのフッサールの還元に対する曖昧な立場については、Crowell 2001, 197-202を参照。

- 20 ハイデガーは『哲学への寄与論稿』のなかで、「存在論的」(すなわち、アリストテレス的—スコラ哲学的)超越と、「存在者の開け」——すなわち、その文脈性——に現存在が身をさらしていることとしての『存在と時間』の「基礎的—存在論的」超越とを明確に区別している (GA 65, 217/170)。
- 21 瞬間 (*Augenblick*) については、特にHeidegger, SZ, 335–350/320–334を参照。
- 22 瞬間における現存在の単独化 (*Vereinzelung*) については、特に、GA 29/30, 251/169; SZ, 338–339/323–324を参照。
- 23 このことは、ハイデガーが後年に『存在と時間』に書き加えた欄外注のなかで、非常に簡潔に述べられている。「超越は、もちろん——形而上学的な響きをもっているにもかかわらず——スコラ哲学的な、ギリシア的・プラトンのなクoinon [koinon] [共通なもの] ではなく、むしろ脱自的な——時間性 [*Zeitlichkeit*]——テンポラリテート [*Temporalität*] としての超越である[……。]。しかし、超越は存在 [beyng] [*Seyns*] の真理、すなわち性起の出来事 [*Ereignis*] から生じる。」(SZ, 440n[a] ad 38/36n; 訳文変更) 19世紀初頭にはヘーゲルやヘルダーリンによってまだ使われていた旧式のドイツ語正書法 *Seyn* は、ハイデガーによって1930年代と1940年代の著作のなかで、形而上学的伝統のなかで考えられていたような存在から性起の出来事としての存在の「形而上学以後の」概念を名指すために(完全に一貫した仕方ではないにせよ)使われている。現在では確立された慣例に従って、私はこの用語を同じく旧式中世英語の綴りである 'beyng' で表す。
- 24 Heidegger, GA 65, 322/255を参照。「たとえ『超越』が従来とは異なる仕方、すなわち超—感性的なものとしてではなく、乗り越ええ [*Überstieg*] として把握されるとしても、それでもなお現—存在の本質はこの規定によってあまりにも容易に歪められてしまう。というのも、このような仕方、超越は下とこちら側 [*Unten und Diesseits*] とを前提し、「自我」、すなわち主観の行為として誤解される危険がまだあるからである。こうして結局、この超越という概念でさえもプラトン主義に陥ってしまう。」(訳文変更; cf. GA 65, 217/169–170) 『存在と時間』の問いの圏域のなかで動く思索の語彙から、私は『実存』という語を削除した。その代わりに、一見正反対の名称である『内立性』 [*Inständigkeit*] が用いられる。」(GA 49, 54; 拙訳) 後期のハイデガーによる「超越論的」という用語の系譜学については、Heidegger 1997b, 133–143/77–83を参照。
- 初期および後期のハイデガーの超越論的伝統に対する曖昧な関係についての詳しい議論については、Dahlstrom 2005を参照。マイケル・インウッド (1999, 227) は、ハイデガーは「概念ではなく『超越』という語を拒絶している」と強調している。Cf. Malpas 2007。
- 25 ハイデガーが「物」講演で明確にしようとしているのは、おそらくこのことである。「それぞれの物は、四方界 [*Geviert*] を、世界の単純な単一性の出来事 [happening] へと滞留 [*verweilt*] させる。[……。] 物となるものは何でも、世界の反照—遊戯 [*Spiegel-Spiel*] の鳴り響き [ringing] [*Gering*] から起こる [*ereignet sich*]。」(Heidegger, 2000a, 173, 174/178, 179; 訳文変更)
- 26 たとえば、Heidegger, GA 65, 474/373を参照。「いまや、存在者と存在 [*Seyn*] との間の区別 [*Unterscheidung*] はどうなるのか。いまや、私たちはこの区別を、単に形而上学的に考えられた、したがってすでに誤解された、存在それ自体である決—断 [*Ent-scheidung*] の前景として把握する [……。]。」(訳文変更) ハイデガーは、後に「根拠の本質について」の欄外注で、存在と存在者の間の『区別』を克服することの必要性と、『区別』を存在 [*Seyn*] そのものとして考えること、の必要性を語っている (Heidegger 1996, 134n[c]/105n[c])。
- 27 Heidegger, GA 65, 472, 474/372–373: 「性起の出来事の真理 [*Wahrheit des Ereignisses*] における存在 [*Seyns*] の完全な本質現成 [*Wesung*] は、存在が、そして存在のみがあり、存在者 [*das Seiende*] があるのではないことを悟らせる。[……。] 存在は唯一的にあり、したがってそれは決して存在者で「ある」のではなく [……。] もし存在者があるのではないのであれば、それは存在者があるその真理を護り保つこととして存在に属し続けることを意味する [……。]。」(訳文変更)
- 28 Heidegger, GA 65, 66/53: 「存在が性起の出来事 [*Ereignis*] として考えられる場合には、本質性 [*Wesentlichkeit*] は存在それ自体の根源性と唯一性 [*Einzigkeit*] によって規定される。そこでは、本質

は一般的なものではなく、むしろまさに、それぞれの瞬間における唯一性の本質現成 [Wesung] なのである。」(訳文変更)「存在者が存在 [Sein] を、自らにとって『最も一般的な』ものとみなすのか [……]、それとも、その唯一性において存在が語になり、存在者を一回的なもの [Einmaliges] として徹底的に気分づけるのか」(GA 65, 90-91/72; 訳文変更)が決定されねばならない。GA 65, 55/45: 「一回的であるものだけが反復されうる」(訳文変更)。Cf. Heidegger, GA 66, 128/108: 「存在それ自体が唯一性であり、一回性 [Einmaligkeit] である。[……] この一回性は『もう一度』を排除するものではなく、その逆である。」(訳文変更)

- 29 ダールストロームが挙げる後期ハイデガーにおける他の超越論的な痕跡は、時-空 (Zeit-Raum) としての存在の概念と、存在者を「根拠づけるもの」としての存在の概念である。
- 30 Cf. Heidegger 2003, 136/102: 「絶対者の絶対性は、解放 [Absolvanz] (関係からの解き放ち)、全面的に解放すること (解き放ちが完全であること)、赦免 (その完全性に基づく放免) の統一性によって特徴づけられる。」(訳文変更)
- 31 ハイデガーは1962年の「時間と存在」講演に関するゼミナールのなかで、ヘーゲルの絶対者の概念と彼自身の性起の出来事との概念との比較を行っている。「ヘーゲルにとって人間は絶対者の自己への到来の場であるから、その自己への到来は人間の有限性の克服につながる。対照的に、ハイデガーにとっては、まさに有限性が見えてくる——人間の有限性だけでなく、性起の出来事 [Ereignisses] そのものの有限性が見えてくるのである。」(2000b, 53/49) Cf. Agamben 1999.
- 32 Heidegger, SZ, 261, 262/250, 251: 「私たちは死へとかわる存在を、或る可能性へとかわる存在、つまり現存在そのものの際立った可能性へとかわる存在として特徴づけねばならない。[……] 可能性としての死は、現存在に『現実化されるべき』ものを何も与えず、現存在自身が現実的なものとしてありうるものを何も与えない。死は、何かに対するすべての態度様式の、つまりすべての実存する仕方の不可能性の可能性である。[……] この可能性は、何かに専心するようになり、可能である現実化を『思い描き』、そうしてその可能性を忘れてしまうことへの支えにはならない。」(訳文変更)
- 33 メイヤスーはおそらく、「神の非存在」(L'insistence divine; Meillassoux 2006b, 67n1/132n15を参照)に関する近刊の多巻にわたる著作において、彼の議論を続け、その体系を完成させるつもりであろう。この著作の現在の原稿からの翻訳抜粋は、Harman (2011) に掲載されている。この著作の中心的なテーマのいくつかは、Meillassoux 2006aで論じられている。
- 34 バディウは挑発的に次のように主張する。「彼 [カント] が仕掛けた批判の機械は、長らく哲学を害してきた [……]。カントは私たちの『有限性』という悲惨なテーマの発明者である。」(2006b, 561/535)

## 参考文献

- Aertsen, J. A. 1998. "Transzendental II: Die Anfänge bis Meister Eckhart." In *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Vol. 10, 1360–1365. Edited by Joachim Ritter and Karlfried Gründer. Basel: Schwabe.
- . 2012. *Medieval Philosophy as Transcendental Thought: From Philip the Chancellor (ca. 1225) to Francisco Suárez*. Leiden: Brill.
- Agamben, G. 1999. "Se: Hegel's Absolute and Heidegger's Ereignis." In *Potentialities: Collected Essays in Philosophy*, 116–137. Edited and translated by Daniel Heller-Roazen. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Aristotle. 1924. *Metaphysics*. Vol. 1–2. Edited by David Ross. Oxford: Oxford University Press.
- Badiou, A. 1988. *L'être et l'évènement*. Paris: Seuil. Translation: Badiou, A. 2005. *Being and Event*. Translated by Oliver Feltham. London: Continuum.
- . 1989. *Manifeste pour la philosophie*. Paris: Seuil, 1989. Translation: Badiou, A. 1999. *Manifesto for Philosophy*. Translated by Norman Madarasz. Albany: State University of New York Press.
- . 2006a. "Préface." In Meillassoux, Q. *Après la finitude: essai sur la nécessité de la contingence*. Paris: Seuil, 9–11. Translation: Badiou, A. 2008. "Preface." *After Finitude: An Essay on the Necessity of Contingency*. Translated by Ray Brassier. London: Continuum, vi–viii.
- . 2006b. *Logiques des mondes: L'être et l'évènement 2*. Paris: Seuil. Translation: Badiou, A. 2009. *Logics of Worlds: Being and Event 2*. Translated by Alberto Toscano. London: Continuum.
- Blattner, W. D. 1994. "Is Heidegger a Kantian Idealist?" *Inquiry* 37/2, 185–201.
- . 1999. *Heidegger's Temporal Idealism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2004. "Heidegger's Kantian Idealism Revisited." *Inquiry* 47/4: 321–337.
- . 2007. "Ontology, the *A Priori*, and the Primacy of Practice: An Aporia in Heidegger's Early Philosophy." In *Transcendental Heidegger*, 10–27. Edited by Steven Crowell and Jeff Malpas. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Carr, D. 2007. "Heidegger on Kant on Transcendence." In *Transcendental Heidegger*, 28–42. Edited by Steven Crowell and Jeff Malpas. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Crowell, S. G. 2001. *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning: Paths toward Transcendental Phenomenology*. Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Dahlstrom, D. 2005. "Heidegger's Transcendentalism." *Research in Phenomenology* 35/1: 29–54.
- Derrida, J. 2003. *Voyous*. Galilée: Paris. Translation: Derrida, J. 2005. *Rogues: Two Essays on Reason*. Translated by Pascale-Anne Brault and Michael Naas. Stanford, CA: Stanford University Press. [ジャック・デリダ『ならず者たち』鶴飼哲、高橋哲哉訳、みすず書房、2009年。]
- Engelland, C. 2008. "Heidegger on Overcoming Rationalism through Transcendental Philosophy." *Continental Philosophy Review* 41/1: 17–41.
- Ennis, P. J. 2011a. *Continental Realism*. Winchester: Zero Books.



- . 2011b. “The Transcendental Core of Correlationism.” *Cosmos and History* 7/1: 37–48.
- Foucault, M. 1990. *Les mots et les choses*. Paris: Gallimard. Translation: Foucault, M. 2002. *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences*. London: Routledge.
- Harman, G. 2007. “Quentin Meillassoux: A New French Philosopher.” *Philosophy Today* 51/1: 104–117.
- . 2011. *Quentin Meillassoux: Philosophy in the Making*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Hegel, G. W. F. 1980. *Gesammelte Werke*, Vol. 9: *Phänomenologie des Geistes* [1807]. Edited by Wolfgang Bonsiepen and Reinhard Heede. Hamburg: Meiner (GW 9). Translation: Hegel, G. W. F. 1977. *Phenomenology of Spirit*. Translated by A. V. Miller. Oxford: Oxford University Press.
- . 1985. *Gesammelte Werke*, Vol. 21: *Wissenschaft der Logik: Die objektive Logik*, Vol. 1/1: *Die Lehre vom Sein* (1832). Edited by Friedrich Hogemann and Walter Jaeschke. Hamburg: Meiner (GW 21). Translation: Hegel, G. W. F. 2010. *The Science of Logic*. Translated by George di Giovanni. Cambridge: Cambridge University Press. [ヘーゲル『大論理学』（上巻の一）武市健人訳、岩波書店、2002年；ヘーゲル『論理の学』（第1巻 存在論）、山口祐弘訳、作品社、2012年。]
- . 1992. *Gesammelte Werke*, Vol. 20: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften* (1830). Edited by Wolfgang Bonsiepen and Hans-Christian Lucas. Hamburg: Meiner (GW 20). Translation: Hegel, G. W. F. 2010. *Encyclopaedia of the Philosophical Sciences in Outline, Part I: Science of Logic*. Translated by Klaus Brinkmann and Daniel O. Dahlstrom. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heidegger, M. 1983. *Die Grundbegriffe der Metaphysik: Welt-Endlichkeit-Einsamkeit* [1929–30]. *Gesamtausgabe* 29/30. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 29/30). Translation: Heidegger, M. 1995. *The Fundamental Concepts of Metaphysics: World, Finitude, Solitude*. Translated by William McNeill and Nicholas Walker. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1988. *Kant und das Problem der Metaphysik* [1929], 6th edition. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann, 1998. Translation: Heidegger, M. 1997. *Kant and the Problem of Metaphysics*. Translated by Richard Taft. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1989. *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)* [1936–38]. *Gesamtausgabe* 65. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 65). Translation: Heidegger, M. 2012. *Contributions to Philosophy (Of the Event)*. Translated by Richard Rojcewicz and Daniela Vallega-Neu. Bloomington: Indiana University Press. [ハイデッガー全集第65巻『哲学への寄与論稿（性起から〔性起について〕）』、大橋良介、秋富克哉、ハルトムート・プフナー訳、2005年。]
- . 1991. *Die Metaphysik des deutschen Idealismus* [1941]. *Gesamtausgabe* 49. Edited by Günter Seubold. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 49). [ハイデッガー全集第49巻『ドイツ観念論の形而上学（シェリング）』、菅原潤、ゲオルク・シュテンガー訳、2010年。]

- . 1994a. *Einführung in die phänomenologische Forschung* [1923–24]. *Gesamtausgabe* 17. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 17). Translation: Heidegger, M. 2005. *Introduction to Phenomenological Research*. Translated by Daniel O. Dahlstrom. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1994b. *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs* [1925]. *Gesamtausgabe* 20, 3rd edition. Edited by Petra Jaeger. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 20). Translation: Heidegger, M. 1992. *History of the Concept of Time: Prolegomena*. Translated by Theodore Kisiel. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1996. *Wegmarken*, 3rd ed. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann. Translation: Heidegger, M. 1998. *Pathmarks*. Edited by William McNeill. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1997a. *Besinnung* [1938–39]. *Gesamtausgabe* 66. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 66). Translation: Heidegger, M. 2006. *Mindfulness*. Translated by Parvis Emad and Thomas Kalary. London: Continuum.
- . 1997b. *Der Satz vom Grund* [1955–56], 8th ed. Stuttgart: Neske. Translation: Heidegger, M. 1991. *The Principle of Reason*. Translated by Reginald Lilly. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1997c. *Die Grundprobleme der Phänomenologie* [1927]. *Gesamtausgabe* 24, 3rd edition. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann (GA 24). Translation: Heidegger, M. 1982. *The Basic Problems of Phenomenology*. Translated by Albert Hofstadter. Bloomington: Indiana University Press. [ハイデッガー全集第24巻『現象学の根本諸問題』、溝口競一、松本長彦、杉野祥一、セヴェリン・ミュラー訳、2001年。]
- . 1998a. “Die seinsgeschichtliche Bestimmung des Nihilismus” [1944–46]. In *Nietzsche*, Vol. 2, 6th ed. Stuttgart: Neske, 311–315. Translation: Heidegger, M. 1991. “Nihilism as Determined by the History of Being,” in *Nietzsche*, Vol. 4: *Nihilism*, 207–210. Translated by Frank A. Capuzzi and edited by David Farrell Krell. San Francisco: Harper San Francisco).
- . 1998b. *Kant und das Problem der Metaphysik* [1929], 6th ed. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann. Translation: Heidegger, M. 1997. *Kant and the Problem of Metaphysics*. Translated by Richard Taft. Bloomington: Indiana University Press.
- . 2000a. “Das Ding” [1950]. In *Vorträge und Aufsätze*, 9th ed. Stuttgart: Neske, 157–179. Translation: Heidegger, M. 1971. “The Thing.” In *Poetry, Language, Thought*. New York: Harper & Row, 161–184. [マルティン・ハイデッガー『技術とは何だろうか——三つの講演』森一郎編訳、講談社、2018年。]
- . 2000b. *Zur Sache des Denkens*, 4th ed. Tübingen: Niemeyer. Translation: Heidegger, M. 2002. *On Time and Being*. Translated by Joan Stambaugh. Chicago: University of Chicago Press.
- . 2001. *Sein und Zeit* [1927], 18th edition. Tübingen: Niemeyer (SZ). Translation: Heidegger, M. 2010. *Being and Time*. Translated by Joan Stambaugh, revised by Dennis J. Schmidt. Albany: State University of New York Press. [ハイデッガー『存在と時間』(全3巻)、原佑、渡

- 邊二郎訳、中央公論新社、2003年。]
- . 2002. *Identität und Differenz* [1957], 12th ed. Stuttgart: Klett-Cotta. Translation: Heidegger, M. 2002. *Identity and Difference*. Translated by Joan Stambaugh. Chicago: University of Chicago Press. [マルティン・ハイデッガー『同一性と差異性』(ハイデッガー選集10)、大江精志郎訳、理想社、1961年。]
- . 2003. “Hegels Begriff der Erfahrung “ [1942–43]. In *Holzwege*, 8th ed. Edited by Friedrich-Wilhelm von Herrmann. Frankfurt am Main: Klostermann, 115–208. Translation: Heidegger, M. 2002. “Hegel’s Concept of Experience.” In *Off the Beaten Track*, 86–156. Translated by Julian Young and Kenneth Haynes. Cambridge: Cambridge University Press. [ハイデッガー全集第5巻『杣径』、茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、創文社、1988年。]
- Husserl, E. 1950. *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, *Husserliana* 1. Edited by Stephan Strasser. The Hague: Martinus Nijhoff (Hua 1). Translation: Husserl, E. 1977. *Cartesian Meditations: An Introduction to Phenomenology*. Translated by Dorion Cairns. Dordrecht: Kluwer. [フッサール『デカルトの省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年。]
- . 1954. *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie* [1936], *Husserliana* 6. Edited by Walter Biemel. The Hague: Martinus Nijhoff (Hua 6). Translation: Husserl, E. 1970. *The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology*. Translated by David Carr. Evanston, IL: Northwestern University Press. [E・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫、木田元訳、中央公論新社、1995年。]
- . 1966. *Analysen zur passiven Synthesis: Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten 1918–1926*, *Husserliana* 11. Edited by Margot Fleischer. The Hague: Martinus Nijhoff (Hua 11). Translation: Husserl, E. 2001. *Collected Works*, Vol. 9: *Analyses Concerning Passive and Active Synthesis: Lectures on Transcendental Logic*. Translated by Anthony J. Steinbock. Dordrecht: Kluwer.
- . 1984. *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Zweiter Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis* [1901]. *Husserliana* 19/2. Edited by Ursula Panzer. The Hague: Martinus Nijhoff (Hua 19/2). Translation: Husserl, E. 2001. *Logical Investigations*, Vol. 2. Translated by J. N. Findlay and edited by Dermot Moran. London: Routledge.
- Inwood, M. 1999. *A Heidegger Dictionary*. Oxford: Blackwell.
- John Duns Scotus. 1893. *Opera omnia*, Vol. 7: *Quaestiones subtilissimae super libros Metaphysicorum Aristotelis*. Edited by Luke Wadding. Paris: Vivès.
- Kant, I. 1928. *Kant’s Gesammelte Schriften*, Vol. 18: *Dritte Abtheilung: Handschriftlicher Nachlaß*, Vol. 5: *Metaphysik*, 2. Theil. Berlin: De Gruyter.
- . 1998. *Kritik der reinen Vernunft* [A 1781; B 1787]. Edited by Jens Timmermann. Hamburg: Meiner (CPR). Translation: Kant, I. 1998. *Critique of Pure Reason*. Translated by Paul Guyer and Allen Wood. Cambridge: Cambridge University Press. [『カント全集4』(純粹理性批判 上)有福孝岳訳、岩波書店、2001年。]
- Malpas, J. 2007. “Heidegger’s Topology of Being.” In *Transcendental Heidegger*, 119–134. Edited by

- Steven Crowell and Jeff Malpas. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Meillassoux, Q. 2006a. “Deuil à venir, dieu à venir.” *Critique* 62/704–705: 105–115. Translation: Meillassoux, Q. 2008. “Spectral Dilemma.” In *Collapse*, Vol. 4: Concept Horror, 261–275. Edited by Robin Mackay. Falmouth: Urbanomic.
- . 2006b. *Après la finitude: essai sur la nécessité de la contingence*. Paris: Seuil. Translation: Meillassoux, Q. 2008. *After Finitude: An Essay on the Necessity of Contingency*. Translation by Ray Brassier. London: Continuum. [カンタン・メイヤスー『有限性の後で——偶然性の必然性についての試論』千葉雅也、大橋完太郎、星野太訳、人文書院、2016年。]
- Tang, H. 2011. “Transcendental Idealism in Wittgenstein’s *Tractatus*.” *The Philosophical Quarterly* 61/244: 598–607.
- Williams, B. 1973. “Wittgenstein and Idealism.” *Royal Institute of Philosophy Lectures* 7: 76–96.
- Žižek, S. 2006. *The Parallax View*. Cambridge: MIT Press.

Translated from: “Transcendental Idealism and Strong Correlationism: Meillassoux and the End of Heideggerian Finitude,” by Jussi Backman, in *Phenomenology and the Transcendental*, edited by Sara Heinämaa, Mirja Hartimo, and Timo Miettinen, pp. 276–294. Copyright 2014. Routledge. Reproduced by permission of Taylor & Francis Group through PLSclear.

## 訳者付記

- ・( ) および [ ] は原著者による。
- ・[……] は原著者による中略である。
- ・[ ] 内は訳者による補足である。原語の挿入や参照した邦訳を示すために用いた。

(著者：ユッシ・バックマン・Jussi Backman・タンペレ大学)

(訳者：金成 祐人・かなり ゆうと・帝京大学)



●編集委員●

植村玄輝  
加國尚志  
小手川正二郎  
三村尚彦

現象学年報 40

---

2024年11月15日 発行

編集発行 日本現象学会

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目  
北海道大学大学院文学研究院 田口茂研究室内

印刷 大阪書籍印刷株式会社

〒555-0044 大阪市西淀川区百島1-3-78  
TEL 06(6476)3324 FAX 06(6476)3329